

## 令和7年度 第1回社会教育委員会議 議事録

第1回会議では、「かかわりあい」「まじりあい」「まなびあい」という令和6年提言の視点に沿って各委員の活動を振り返り、自己紹介も兼ねて他の委員と共有しました。

発言者	発言内容
委員	<p>「かかわりあい」「まじりあい」「まなびあい」は、地域の子ども食堂が正にその場となっている。</p> <p>「お節介」とは、「節度ある介入」。大人と子どもの距離感、隣同士の距離感など、距離感が難しい。今の時代に合った距離感を考えなければならないが、「お節介」はとても大事。</p> <p>車椅子利用の子どもが食堂に来た際、大人が何も言わなくても、玄関の靴を並べたり、水を注いだりなど積極的に動いていた。どのような支援が必要かということを学んでいる。支援が必要なことと自分でできることを察知して、ちょうどよい支援を行っている。適切にまじりあっていると感じる。</p>
委員	<p>「少年自然の家」はまさに体験活動の場。ICT活用ということでタブレット等使うことはあるが、先日、体験に来た子どもが、「iPadがなくても、携帯がなくても、楽しかった」と言っていた。アウトドアも大事なんだけど、学校でそういった自然活動をするのが少なくなってきた。山登りなども昔はしていたが、教育課程から消えてしまった。そういった場を自然の家が提供できれば良いと感じている。</p> <p>それとは別に公民館の活動をしているが、地域の祭りや清掃など、やることが目的ではなく、互いの顔を知ったり、犯罪の抑止力になったりといったことが目的。コロナ禍で少なくなった行事を復活させ、「かかわりあい」や「まじりあい」が生まれるといいと思う。</p>
委員	<p>先日、高鍋駅が新しくなったが、駅周辺を活性化させたいということで、NPO法人「イツノマ」と繋がり、高鍋高校の生産物を一緒に売ったり、地域の方がカレーなどの販売をしたりしている。</p>
委員	<p>夏休み、ラジオ体操をしているが、毎日違う親が当番をすることで、地域の子どもの顔と名前を覚える。これは当番制にしてよかったと思った。</p> <p>「まじりあい」が感じられる場面言えば、敬老会の行事に子ども会が参加し、歌をプレゼントするなどの取組もある。</p>
委員	<p>まずは知り合うことを目的に地域に住む様々な人（障がい児・者、中学生、大学生…など）に防災体験教室への参加を呼び掛けた。</p> <p>障がいのある方と地域の方との関わりは非常に難しいが、今回は都城市の生涯学習課が公民館講座等の場を設定し、コーディネートしてくれた。</p> <p>中高生からは企画の段階から参加したかったという声が聞かれた。</p> <p>まずは知り合うことが大事。話すことできなかったとしても、その場に「いる」ということが大事。</p>

委員	<p>レッスン中に「身近なできごとを英語で話しましょう」というお題になったとき、幅広い年齢層の受講生がいることで、まじりあいが生まれている。レッスン終わりを待っている保護者間でのコミュニケーションも生まれている。自身の居住区では得られない情報（受験情報など）が得られる機会となっている。</p> <p>留学生と交流する機会があった。自分たちの学んだ英語で一生懸命話そうとすることはもちろん、自分たちが気に留めていなかったことに対する質問がある中で、自国の文化に対する気付きがあったようだ。</p>
委員	<p>地域の活動の1つは学校、もう1つは公民館だと思う。学校の子どもたちを対象にしたロープワーク・避難訓練を織り交ぜながら実施した。防災食を作ったが、どれもとてもおいしくできて、他の公民館でも「やってみたい」という声が挙がった。楽しいところに人は集まると思った。</p>
委員	<p>朝の見守り活動をしている。そこに集まる人（民生委員や地域の人など）は自然と顔見知りになっていく。</p>
委員	<p>「まじりあい」から先はハードルが高いと感じる。</p> <p>勤務校では、特別支援学校との交流を年に何回か設けている。また、地域の方に参画していただいて福祉教育を推進している。とても大事なことだが、日常生活上で、激しい言葉、強い言葉を聞くこともあり、学んだことを生活に生かすのは難しいと感じることがある。</p>
委員	<p>様々な人たちとかかわりあう体験をする中で、「障がいのことを知ることができた、手話などに興味をもつことができた」などの感想が得られた。障がいのある方、御家族が中心ではあるが、興味があれば企画には誰でも参加できる。「ピザづくり」を企画すれば、それに興味があって参加してくれる人もいる。仲間がいることで安心できる、そういう場になればよいと感じる。しかもまた会おうという楽しみもできる。自分たちが支えられることを通して、自分も支えたいと思う子どもたちも出てきた。</p>
委員	<p>まちづくり協議会が町内小・中学校を支援することになった。「地域で子どもたちを育てる」という方針の下、地域の歴史・文化を教える活動をしている。中1、新任の先生方を対象に、地区内の史跡を案内して、地域に詳しくなってもらっている。だんだんと子どもたちが地域に目を向けてくれるようになり、「子どもの声を聞く会」の内容も地域の実情に根差したものとなった。子どもたちとの「まじりあい」がだんだん進んでいるように思う。防災のこと、地域のことをよく尋ねられるが、もう一度学び直さないと教えることができない。教える側が勉強し直す機会にもなっている。</p> <p>中学生の探究学習について、ヒアリングに協力した。</p>
委員	<p>西都市の全中学校が市民ホールに集まって行う学習発表会、西都学アワードを実施している。市長や議員さんも見に来る。</p> <p>中学校3年生にどんなことを学ばせるとよいかということランチを兼ねて話し合った。そうすることで、中学生～大学生、地域の人、みんな集まってワークショップしましょうということになった。学校の行事というと、学校の先生だけが作るイメージがあるが、「地域の方も一緒に」というのが良い。</p>

	<p>都於郡中・三納中は同じ取組を発表していた。その取組とは、地域の祭りを復活させようというもの。地域づくり協議会の人を講師にお招きし、都於郡中はPR動画を作成、三納中はのど自慢大会の企画などしていた。祭りは学び合いの機会になっているなど思った。地域の方が寄ってたかって手助けして下さるので心強いし、子ども側からも、「大人と話すのは敷居が高いように感じていたが、皆さんとても優しくかった。」という感想が聞かれた。「私もそんな大人になりたい。」という感想もあった。</p>
委員	<p>ボランティアで、子どもたちのためにできることはないか協議した。その中で、地元の中学校の校内を見て危険箇所を点検するという活動があった。とてもよい中庭があるのに、整備に手が回らず、使われていなかった。その状況を見て、ボランティアの中で「使えるように整備しよう。」という気運が上がり、PTAの方々・生徒も巻き込んで整備することになった。</p> <p>町民にも、広報誌をとおして呼びかけをしているところ。</p>
委員	<p>祭りと言えば、地元の中学校は、はじめ祭りの後のゴミ拾いボランティアのみ実施していたが、「もっと参加していきたい。」という熱意の下、司会の手伝い、企画・運営にも携わるようになった。意気揚々としており、周りも認めている。</p> <p>地区を挙げての祭りもある。住民はもちろん、行政職員もその出身者は関わり、毎年大成功である。</p>
委員	<p>登校班がなくなった。登校班内での親のトラブルが原因の模様。登校班の中で学ぶこともあるだろうに、親の都合で無くしていいのかと思う。</p> <p>登校班が減ると、「もう立ち番も（しなくて）いいが。」という声も出る。</p>
委員	<p>自分の住む自治体では、その点うまくいっている。「2のつく日」は、学校に行ける人は行き、行けない人も庭先から見守り活動をしている。子どもの成長を見ることもできてうれしい。</p>